

2. 事業の概要と成果	
(1) プロジェクト目標の達成度	上位目標 1：子どもたちの心的外傷ケアが実施され、PTSD からの予防が可能となる。 上記目標 2：活動地において心理社会的ケア実践者が育成され、地元の人々の手によってケアを継続できる。 1) 子どもたちの、心的外傷についての対応力が増すことで、占領による困難な状況下でも PTSD¹に対する予防力がつくこと（上位目標 1 に貢献）： ガザ・西岸地区において、心理社会的ケア（以下、PSC）プログラムを合計 187 名（12 名は引越や不登校、親の都合にてドロップアウトのため含めない）の子どもに対し実施した結果、1 年間を通してプログラムに参加した全ての子どもたちについて、メンタルヘルスに関する指数の改善、もしくは PTSD の完全発症の予防と一部発症の場合の症状改善・悪化の予防が見られ、目標を達成した。 （参照：別添 7 専門家レポート 2：心理社会的ケアプログラムの総合評価） 2) 知識と経験を持つケア実践者が育成され、各事業地に本来の効果的な心理社会的ケアモデルが根付くこと（上位目標 2 に貢献）： ガザ地区：1 年間を通し、33 回に渡る座学とワークショップ（以下、WS）実践の研修を実施し、今後も PSC を実践することができるレベルのスキルを身につけた 18 名の PSC 実践者が育成され目標を達成した。上位目標である、本事業後も継続的に地元子どもたちへのケアを実施できる体制作りに貢献した。現在は不定期に実践者から子どもたちに対しケアが提供されており、今後も提携団体とケアプログラムの提供方法について引き続き検討していく。 西岸地区：ナブルスとラマッラにおいて PSC プログラムの理論を身につけた実践者が 46 名育成され目標を達成した。桑山専門家からのトレーニングは予定の 2 回中 1 回しか実施できなかったために本年度における対象者の絶対数としては目標より少ないものの、代わりに現地事業スタッフのスキルを向上させることができた結果、今後事業スタッフが実施するトレーニングの質の更なる向上に寄与した。3 年次は、専門家による監修を強化しながら現地スタッフによるトレーニングを実施する予定。 3) ガザ地区と西岸地区における心理社会的ケアの実践が拡大し、その課題を両地区で共有し、パレスチナ全土に心理社会的ケアのさらなる拡大を確立すること（上位目標 2 に貢献）： ガザ地区：現地マネージャーが本事業についてのインタビューでテレビ出演しプログラムの紹介を行い（Palestine Space TV@2019 年 2 月 24 日）、またプログラムの様子がメディア（Palestine Today）に取り上げられオンライン記事が 2 回配信されたことで、本活動がパレスチナ全土を超えた多くの人々の目に触れることができた。 西岸地区：年間を通し合計 9 回地元ラジオにて PSC プログラムの紹介を行い、またシンポジウムの様子が地元メディア ALQUIDS 社に取り上げられ記事と動画がオンライン配信され、パレスチナ全土の多くの人々に周知された。

	また、両地区の活動について Facebook ページにて投稿したことにより多くの人々に当心理社会的ケアプログラムについて周知された。パレスチナにおいて多くの人々・団体から関心が寄せられ既に様々な団体等から見学や連携可能性を含めた問い合わせが来ており、一部既に本事業外にてPSC WSが実施されたケースもあることから、目標を達成した。今後の更なる拡大が期待される。
(2) 事業内容	1. ガザ地区における心理社会的ケアの実践と人材育成 1-1. 子どもたちを対象とした心理社会的ケアプログラムの実施 3 提携団体（エル・アマル社会復帰協会（Al Amal Rehabilitation Society）（ラファ市）、ブリリアント・フューチャー協会（Brilliant Future Association）、アバサン地区町内会（Neighborhood Committee of Abasan Al Jadida）（共にハインユニス市）において、各2クラス、計6クラスにて開催。女子50名（うち聴覚障がい児7名）、男子50名（うち聴覚障がい児12名）、計100名の8-13歳（プログラム開始時）の子どもたちに対し、週1回のWSにてPSCを実施（うち4名が引越や親の都合にてドロップアウト）。各クラスとも（最終発表会後のWSを除き）33コマWSを実施し、最後にその集大成として全クラス合同で最終発表会を行なった（全35コマ、うち3日間は其々2コマ分を併せて実施）。 （参照：別添2-1 心理社会的ケアプログラムの実施実績（ガザ地区）） 1-2. 子どもたちを対象とした相互理解クラスの実施 全団体の子どもたちを集めた6日間の集中WS（サマーキャンプ）を7月に実施した。普段のWSクラスをまたいで混合した4クラスに分け、様々なWSを行なった。 1-3. 関係者・関係機関との連携活動 子どもたちを取り巻く関係者と連携して子どもたちをサポートできるよう、関係者・関係機関とのミーティングを合計24回実施した。 ➤ エル・アマル社会復帰協会： ・当該団体代表、関係者：2回 ・家族意見交換会：2回 ・家庭訪問、家族との面談：2回 ・障がい児学校の先生：4回（以上）

¹ PTSD：心的外傷後ストレス障害（Post-Traumatic Stress Disorder）。命の安全が脅かされるような恐怖とショックを伴う出来事（戦争、天災、事故、犯罪、虐待など）による精神的な外傷（トラウマ）の後遺症。主な症状として、回避症状（トラウマの原因となった出来事に関することを避けようとする心の動き）、侵入症状（「再体験」とも呼ばれるように、トラウマの原因となった出来事が悪夢やフラッシュバックを通して何度も繰り返されること）、過覚醒症状（自律神経の乱れや不眠など、身体が継続的に過剰反応している状態）などがある。PTSDに繋がる病態としては「記憶の倒錯、抜け落ち現象」、「記憶と感情の解離現象」の2つが挙げられ、トラウマ体験に向き合いその記憶と感情を思い出すことでトラウマ体験のストーリーを再構成していくことが回復に有効であるとされる。

- ブリリアント・フューチャー協会：
 - ・当該団体代表、関係者：3 回
 - ・家族意見交換会：2 回
 - ・家庭訪問、家族との面談：2 回
- アバサン地区町内会：
 - ・当該団体代表、関係者：3 回
 - ・家族意見交換会：2 回
 - ・家庭訪問、家族との面談：2 回

また、子どもたちを取り巻く人々への理解促進や今後の展開および普及活動などを見据え、この他に以下の団体と情報交換、意見交換を行った。

- （保健省管轄）Rafah Mental Health Clinic（3 月）
- 国境なき医師団（MSF）Spain（7 月）

1-4. 心理社会的ケア実践者の育成

各提携団体のスタッフそれぞれ 6 名、合計 18 名（男性 10 名、女性 8 名）の研修生を対象に、其々週 1 回、合計 33 回の座学研修計と WS 実践研修を実施した。1 年を通じた研修形態にて、研修生を主に A グループと B グループの 2 グループに分け、A グループには PSC ファシリテーター研修兼指導者研修、B グループには PSC ファシリテーター研修を行っている。其々週 1 回の座学研修を計 31 回と WS 実践研修として事業内容 1-1. の子どもたちを対象とした PSC プログラムを実施した。B グループの実践研修は A グループの指導者研修を兼ねており、A グループの研修生が B グループの研修生に対し実践指導を行なった。なお、全ての実践クラスにおいて事業スタッフである PSC ファシリテーターがスーパーバイザーとして参加し、子どもたちへの WS の質を確保するとともに実践研修を観察・指導した。

（参照：別添 3 心理社会的ケア実践者育成実績（ガザ地区））

また、7 月 25 日（水）には桑山専門家および石橋専門家がクラス G とクラス H にスーパーバイザーとして参加し、実践研修をしている研修生たちに対し直接指導を行なった。

2. ヨルダン川西岸地区における心理社会的ケアの実践と人材育成

2-1. 子どもたちを対象とした心理社会的ケアプログラムの実施

UNRWA の中学校に通う 6-7 年生の子どもたち 99 名を対象に PSC プログラムを実施した。内訳はジャラゾン難民キャンプ 67 名（女子 33 名、男子 34 名）、カランディア難民キャンプ 32 名（女子のみ）（うち 8 名が引越や不登校、親の都合にてドロップアウト）。各クラスにて週 1 回の WS を計 26 コマ（PSC WS18 回、補助的 WS4 回、発表会練習 2 回、初回イントロダクション WS1 回、最終回振り返り WS1 回）、各キャンプにて統合クラスを 1 回、ジャラゾン難民キャンプにてサマーキャンプを 1 回実施した。最後にその集大成として各難民キャンプで其々 1 回最終発表会を実施した。学校のスケジュール変更に伴い当初計画より WS 実施可能日数が減ったため、専門家と相談しながら最大限の効果となるスケジュールにて実施した。

（参照：別添 2-2 心理社会的ケアプログラム実施実績（西岸地区））

2-2. 関係者・関係機関との連携活動

本事業のプログラムに参加する子どもたちと彼らを取り巻く環境についての情報交換のため、関係者・関係機関とのミーティングを計40回実施した。（同一ミーティングに複数の関係者・関係機関が出席したケースを含む）。

- ジャラゾン難民キャンプ：29回
 - ・保護者：4回。加えて、個別連絡を随時実施
 - ・UNRWA スクールカウンセラー：11回（男子小中学校の担当6回、女子小中学校の担当5回）。加えて、週1ベースの情報交換を実施
 - ・UNRWA 学校長：6回（男子小中学校長4回、女子小中学校長2回）。加えて、週1ベースの情報交換を実施
 - ・UNRWA クラス担任：3回（男子小中学校の教師2回、女子小中学校の教師1回）
 - ・UNRWA Education Program：1回（カランディア難民キャンプと兼務）
 - ・UNRWA Relief and Social Services Program：2回
 - ・UNRWA Camp Director：2回
- カランディア難民キャンプ：11回
 - ・保護者：2回。加えて、個別連絡を随時実施
 - ・UNRWA スクールカウンセラー：5回。加えて、週1ベースの情報交換を実施
 - ・UNRWA 学校長：3回。加えて、週1ベースの情報交換を実施
 - ・UNRWA Education Program：1回（ジャラゾン難民キャンプと兼務）

2-3. 心理社会的ケアプログラムの普及と実践者育成

- 6月24日・26日-28日の4日間に渡り、ナブルスにてUNRWAのスクールカウンセラーや地元の心理士等、計17名に対しPSCプログラムのトレーニングを実施した。
- 7月28日-31日の4日間に渡り、ラマツラにてUNRWAのスクールカウンセラーや地元の心理士、心理学を学ぶ学生等、15名の参加者に対し第一回専門家派遣（桑山氏・石橋氏）に伴う映画ワークショップのトレーニングを実施した。
- 9月8日-12、13日の6日間に渡り、ラマツラにてスクールカウンセラーや学校の先生等、計14名に対しPSCプログラムのトレーニングを実施した。
- YMCA (Young Men's Christian Association) やパレスチナ・ソーシャルワーカー・心理士協会、教育省機関等を含む9団体とそれぞれ1回ずつミーティングを行なった。
- 計9回に渡り、事業スタッフが地元ラジオにて本事業の紹介を行なった。詳細は以下の通り。
Nasser 氏（プロジェクト・マネージャー）：
[An-Najah FM](#), [Ajyal Radio](#), 各局1回ずつ, [Raya FM](#), 2回、計4回
Mai 氏（フィールド・オフィサー）：
[Ajyal Radio](#) 4回、[Ramallah FM Radio](#) 1回、計5回

2月に予定していた桑山専門家によるトレーニングは、弊団体现地スタッフ（ファシリテーター）の更なるスキル向上が、今後の彼らによ

	る対外的なトレーニング実施時の効果を高めると判断したことにより、止むを得ず中止とし、現地スタッフへの指導に集中した。本事業の2本柱である子ども達への心理社会的ケアプログラムの実施と同プログラムの実践者育成の目標や質確保、持続可能性を考えた結果、専門家としてより持続的波及効果の高い選択をした。具体的な内容としては、模擬トレーニングや音楽ワークショップのライブ・スーパービジョン（実際のトレーニングを想定したりハーサルや子どもたちのワークショップに参加し、桑山がその場で指導を行うもの）と桑山の派遣期間外に実施されていたワークショップのビデオ・スーパービジョン（日々のワークショップをビデオに撮り、それを後日映写しながら桑山が指導を行うもの）を実施した。 加えて、これらのスーパービジョンの結果を基にした本部・現地スタッフとのアドバイザリー・ミーティングや本事業の最終評価も行った（最終評価内容については別添の専門家レポートご参照）。 彼らとの実践的なやり取りにより、事業内容の実態や子ども達の現状等、よりリアルな詳細を知ることができたため、事業の最終評価をする上で非常に有益だった。 なお、申請書においては7月と2月は中間・最終トレーニングと記していたが、当初より毎回異なる参加者をターゲットとしており、単に7月と2月という時期を指したものであった。 <u>2-4. 心理社会的ケアシンポジウムの開催</u> 2019年3月5日にラマッラにて心理社会的ケアシンポジウムを開催し、18団体、計53名とメディア1社が参加した場において、本プログラムの成果とともに心理社会的ケアの意義や効果を発信し、普及への呼びかけを行った。
(3) 達成された成果	以下に述べる通り、本事業がパレスチナの子どもたちのメンタルヘルス向上とそれに伴う副次的効果として暴力行為の減少に貢献したことはSDGゴール3のターゲット3.4「2030年までに、非感染症疾患（NCD）による早期死亡を、予防や治療を通じて3分の1減少させ、精神保健および福祉を促進する」、および、ゴール16のターゲット16.1「あらゆる場所において、すべての形態の暴力および暴力に関連する死亡率を大幅に減少させる」に直接的に寄与するものである。 <u>直接裨益者：263人</u> ガザ地区：子どもたち100人＋研修生18人＝118人 西岸地区：子どもたち99人＋第一回トレーニング参加者（UNRWAのスクールカウンセラーや地元の心理士等）17人＋第二回トレーニング参加者（専門家派遣時の映画WSトレーニング）15人＋第三回トレーニング参加者（スクールカウンセラーや学校の先生等）14人＝145人 <u>間接裨益者：6,228人</u> プログラムに参加した子どもたちの家族（平均7人）へケア効果が波及 ガザ地区子どもたち100人 × 7人 = 700人 西岸地区子どもたち99人 × 7人 = 693人 プログラムに参加した子どもたちの友達（平均5人）へケア効果が波及

	ガザ地区子どもたち 100 人 × 5 人 = 500 人 西岸地区子どもたち 99 人 × 5 人 = 495 人 研修生・トレーニング参加者が本事業外の子どもたち（平均 60 人）にケアの一部を実践する ガザ地区研修生 18 人 × 60 人 = 1,080 人 西岸地区トレーニング参加者 46 人 × 60 人 = 2,760 人 1. ガザ地区における心理社会的ケアの実践と人材育成 1-1. 子どもたちを対象とした心理社会的ケアプログラムの実施 ➤ 一般精神健康質問紙（GHQ）²と PTSD の 3 大症状およびその他関連症状のチェックシートにて総合的に評価を行なった結果、1 年間を通してプログラムに参加した全ての子どもたちについて、メンタルヘルスに関する指数の改善、もしくは PTSD の完全発症の予防と一部発症の場合の症状改善・悪化予防が見られ、目標を達成した。 ● 一般精神健康質問紙（GHQ）：プログラム前と後の回答結果の比較において、プログラム前の結果と後の結果との間にプログラムの有効性を示唆する因果関係があるかどうかを測る t 検定を実施したところ、全ての子どもを母集団とした総合判定において有意差を示す p 値が 0.05 を下回り因果関係が十分認められプログラムの有効性が証明された。 （参照：別添 5 専門家レポート 1：GHQ の解析結果） ● PTSD の 3 大症状およびその他関連症状のチェックシート：全ての子どもたちにおいて、PTSD の三大症状が全て揃った状態では認められず（PTSD の完全発症の予防）、また約 93% 以上の子どもたちにおいて、三大症状の一部や二次的症状が認められた子どもたちについては 1 つ以上のチェック項目についてそれらの症状の改善・悪化予防（症状数の減少、状態の改善、症状悪化の予防、他症状発症の予防）、症状が発症していない子どもたちについては発症の予防が見られた。 （参照：別添 6 専門家レポート 2：PTSD とその他関連症状の解析結果） ➤ 心理社会的ケアプログラムの効果は必ずしも数字だけでは測れないことに鑑みて併用しているナラティブ評価では、プログラムを通して子ども達のメンタルヘルスが確かに向上した様が確認できた。子どもたちの変化につき、2 人の子どものケースを別紙にて報告する。 （参照：別添 4-1 ナラティブレポート 3（ガザ地区）） ラファ市はエジプトとの国境が近くシナイ半島での爆撃などの音が聞こえることもある位置にあり、抱えているトラウマに加えトラウマとなった出来事を思い起こさせる環境でもある。一方でハインユニス
--	---

² GHQ：一般健康質問紙（General Health Questionnaire）。本事業では GHQ12 問版を桑山医師が子どもたちに合わせて改変した「Kuwayama-12」を使用し、便宜上こちらを「GHQ」と表記している。

³ ナラティブレポート：プログラムを通して生じた変化を子どもの物語としてファシリテーターの視点でまとめた報告書

イスラエルとの国境が近く、デモや衝突などによりトラウマを抱えることとなった子どもたちがいる。またガザ地区全体として、空爆や衝突などがいつ起こるか分からない不安定な環境である。そのような状況の子どもたちに対しPSCプログラムを実施したところ、自分の抱えるトラウマに向き合い、表現しようとする様子が見られ、前向きな変化が観察できた。また、子どもたちにとって、ポジティブな感情だけではなく抱えているネガティブな感情を吐き出す場としても貴重であり、自由に語り表現する環境を整えることができた。子どもたちから、「大人やクラスの子が自分の話や気持ちを聞いてくれることで、安心できるようになった」という声も聞かれた。また特に、研修生を含む、子どもたちと同じ環境に生きるファシリテーターがそれぞれの子どもたちの性格や抱える問題を把握したうえで丁寧に向き合い、各WSの取り組みで子どもたちに対して表現力の向上を図り、子どもたちの気持ちを受け止めるよう努めた。その結果、子どもたちは、各々が心に抱える負の感情を受け止め、しっかりと言葉や作品で表現し、それを友達と共有し、つらい経験と向き合う事ができた。

空爆や衝突などがいつ起こるか分からない「安全の確保」が難しい不安定な場所においては、空爆や衝突によっていつ子どもたちが精神的なダメージを負ってしまうか分からない状況であるため心のケアを行う難しさがあるが、せめてWSを行う場所を「安全な場」として皆で確認し、PSCを行うことにより、辛い出来事に向き合い表現する術を身につけることで、これまでの出来事および将来に起こる出来事への対応力が増すことを確認できたため、引き続き地域において心のケアが根ざし継続されることが期待される。

1-2. 子どもたちを対象とした相互理解クラスの実施

サマーキャンプにて、普段のクラスを超えて多くの子どもたちが一堂に集まり、様々な表現方法のWSや共同作業を行うことで、表現する力を伸ばすことができ、また分かち合いや相互理解が進んだ。WSにおける表現・創作活動の後には全体での展示会や発表会を行い、普段関わるクラスメイトに加え新しい子どもたちと共に、互いに表現したり、見たり・聞いたりという経験を通し、新たな気付きやより深い内的洞察を行うことができた。（活動1-1.の補助的活動であるため、指標は1-1と共通）

1-3. 関係者・関係機関との連携活動

- 関係者・関係機関とのミーティングは家族意見交換会を含めガザ地区での目標16回のうち24回を実施し達成。
- 提携団体からの評価は大変高く、子どもたちがトラウマと向き合い気持ちを語る機会を提供することの重要性の理解が深まった。
以下提携団体職員のコメント・変化の事例：
 - ブリリアント・フューチャー協会代表からのコメント：子どもたちがよりオープンになっていることを実感し、自分たちも子どもたちの話に耳を傾けるようになった。
 - アバサン地区町内会関係者からのコメント：これからも子どもたちが安心して語れる場を大切にしていきたい。
 - エル・アマル社会復帰協会の障がい児クラスの先生：手話での意思疎通のためにWSに参加していた先生が、子どもたちの感情により敏感になり、子どもに自由に表現する余白を与えるように意識するようになった。

	● ブリリアント・フューチャー協会関係者の変化：ポジティブな感情もネガティブな感情もどちらも自由に話し表現する余白を子どもたちに与えることが大事だと知り、子どもに接する時には意識するようになった。 ● 各提携団体：特に保護者が子どもの変化に気付くようになりPSCの効果を知ってから、それを提供している地元団体である提携団体と保護者の信頼関係が増し、またコミュニティとしての自信を得ると共に役割に対し自覚が高まった。 各提携団体の職員へのヒアリングや観察を行ったところ、約8割以上の職員について認識の変化や子どもたちへの対応の変化を確認することができ、目標を達成した。 ➤ 保護者からの評判は高く、プログラムへの理解も得ることができた。以下、保護者からのコメント・変化の事例： ● 「亡くなった父親について語ることがなかったが、WSの中で話すことができるようになったようで、気持ちが楽になった様子である」。 ● 「これまで悪夢を見るなど不安定だったが、プログラムに参加したことで無くなり、勉強に集中するようになった」。 ● 「自分たちも子どもたちの話を聞いてあげるようにしたい」。 ● 「より多くの子どもたちに広めて欲しい」。 これまでプログラムを実施する中で、子どもたちに対する周りの大人の対応や態度が子どもたちに与える影響の大きさを認識し、子どもたちへの直接的な心のケアに加え、子どもたちを取り巻く環境の重要性を益々再確認してきた。それ故、本事業内にて家族意見交換会や提携団体職員とのミーティングを行い、密なコミュニケーションや理解促進を行なったことは、間接的に子どもたちの心のケアにとって重要であり効果的な活動であり、コミュニティの信頼関係向上にも繋がったと評価する。更に、上記のような関係者からのフィードバックは、本プログラムが子どもたちのメンタルヘルス向上に寄与するものであったことを示している。また、各提携団体において、今後PSCプログラムを実施することを計画している。 <u>1-4. 心理社会的ケア実践者の育成</u> ➤ PSCプログラム理解テスト：目標である新規作成1を達成。 ➤ ファシリテーター評価基準：PSCファシリテーター能力評価テストの新規作成1を達成。但し、ガザへの入域の制限から桑山専門家による研修生や現場の観察及びヒアリングの機会が極端に少なかったため、ガザの特性に合わせた評価基準の新規作成は更に情報を収集した後に作成することとし、ガザに入域せずともガザに適した評価基準を作成できるよう努めることとする。本年度は加えて、事業スタッフ（ファシリテーター）による客観評価を行なった。 ➤ PSCプログラム理解テストの結果：理論テストでは全研修生の平均が約65%、スキルテストでは全研修生の平均が約60%の正答率となり、当初目標値の全員8割以上を達成することができなかったが、その要因として、新規作成したテストの問いが複雑だったこと、状況の解釈によっては答えに差が出る質問があることが判明したことに加え、アラビア語の特性として書き言葉と読み言葉に差があることによる誤解が生じたことも目立った。テスト後
--	--

	に研修生全員と回答確認をする中では多くがPSCについて正しく理解していることを確認でき、そして正解しなかった箇所においてはPSCファシリテーターである事業スタッフから改めて指導をした。一部指導が必要となった背景については、ガザへの入域制限から専門家による直接指導とスーパーバイズの機会が極端に少なかったことも影響したと考える。 なお事業スタッフによる研修生の客観評価とその情報に基づいた専門家による評価を行ったところ、全員合格ラインに達し、PSCファシリテーターとして必要なスキルを身につけた実践者の育成を達成した。 ◇ 弊団体スタッフおよび専門家が観察して見られた例： ● 当初は子どもたちの前で恥ずかしそうにしていた研修生が、子どもたちの前で自らオープンになり、リラックスして話すことができるようになった。 ● 子どもたちの話を落ち着いて聞けるようになった。 ● 子どもたちの心の内を耕し表現してもらうにあたり、ファシリテーターの重要なスキルである、「入力」、「出力」、「評価」、「再入力」・・・というサイクルが出来ていた。 ◇ 提携団体からも研修生に対する前向きな評価をいただいた。 ● 研修生が子どもたちの話に耳を傾けるようになったことで、子どもたちが研修生たちに対して心を開くようになり、多く語るようになった。 ● 子どもたちの前で堂々とした態度で場をファシリテートする力が身につけている。 ● 研修生たちの様子が変わった。研修生同士がPSCで学んだことを意見交換し、互いに向上し合っている様子が伺える。 ➤ 本研修に参加した研修生が、本事業外にてPSCプログラムの一部を実施した。以下3事例： ● アバサン地区町内会の研修生チーム：同地区にある公立学校にてPSC WSを実施した。占領による困難な環境に暮らす子どもたちに対し、写真言語WS、描画WS、音楽WS、演劇WSを実施し、トラウマと向き合い対処する方法を身に付ける一助となった。 ● エル・アマル社会復帰協会の研修生チーム：ラファ市メンタル・ヘルス・クリニック開催のサマーキャンプにて子どもたちにPSC WSを実施した。辛い出来事に向き合い、相互に聞き合いながら、ネガティブな感情を表現し対処できるようになる場を提供した。 ● ブリリアント・フューチャー協会の研修生：国境付近でのデモで怪我を負った若者へのPSC WSを実施した。怪我をした時のトラウマに向き合う手段として描画WS等を実施した。 本年度においても特徴的だったのは、研修生の本事業への高いコミットメントと向上心・真剣度の高さであった。本事業の研修生たちのようなガザの若い世代には、占領・紛争の影響や就職難が原因で無気力化・暴力化する傾向が多々見られる。そのような状況下において、本研修生たちは地域にPSCプログラムを広めるためのキーパーソンとして責任感を持って学び、真剣に子どもたちの心に向き合い、また自己に向き合っていた。そしてそれぞれの職場や家庭、友人との人間関係において本事業における子どもたちの心の成長を伝えると同時に、今
--	---

後も地元子どもたちに対しケアを実践することで、地域を支え、占領・紛争下の影響で行き詰った社会に希望を与える存在となることが期待できる。

また、プログラムの普及という側面においては、現地マネージャーが本事業についてのインタビューでテレビ出演しプログラムの紹介を行い ([Palestine TV@2019年2月23日](#))、Palestine TV Facebook での同映像は 1800 回以上再生されている。また本プログラムの様子がメディア ([Palestine Today](#)) に取り上げられ、2 回配信されたオンライン記事は延べ数千人以上の閲覧数があり、Facebook での発信も含め本活動がパレスチナ全土を超えた多くの人々の目に触れる機会を設けることができた。それにより複数の機関から問い合わせが来ており今後の連携に繋がる方法を模索している。

2. ヨルダン川西岸地区における心理社会的ケアの実践と人材育成

2-1. 子どもたちを対象とした心理社会的ケアプログラムの実施

- 一般精神健康質問紙 (GHQ) と PTSD の 3 大症状およびその他関連症状のチェックシートにて総合的に評価を行なった結果、1 年間を通してプログラムに参加した全ての子どもたちについて、メンタルヘルスに関する指数の改善、もしくは PTSD の完全発症の予防と一部発症の場合の症状改善が見られ、目標を達成した。
 - 一般精神健康質問紙 (GHQ) : プログラム前と後の回答結果の比較において、プログラム前の結果と後の結果との間にプログラムの有効性を示唆する因果関係があるかどうかを測る t 検定を実施したところ、全ての子どもを母集団とした総合判定において有意差を示す p 値が 0.05 を下回り因果関係が十分認められプログラムの有効性が証明された。
(参照: 別添 5 専門家レポート 1: GHQ の解析結果)
 - PTSD の 3 大症状およびその他関連症状のチェックシート : すべての子どもたちにおいて PTSD の三大症状が全て揃った状態では認められず (PTSD の完全発症の予防)、また約 94% 以上の子どもたちにおいて、三大症状の一部や二次的症状が認められた子どもたちについては 1 つ以上のチェック項目についてそれらの症状の改善・悪化予防 (症状数の減少、状態の改善、症状悪化の予防、他症状発症の予防)、症状が発症していない子どもたちについては発症の予防が確認された。
(参照: 別添 6 専門家レポート 2: PTSD とその他関連症状の解析結果)
- 心理社会的ケアプログラムの効果は必ずしも数字だけでは測れないことに鑑みて、PTSD チェックシートに加え併用しているナラティブ評価では、プログラムを通して子ども達のメンタルヘルスが確かに向上した様が確認できた。子どもたちの変化につき、2 人の子どものケースを別紙にて報告する。
(参照: 別添 4-2 ナラティブレポート (西岸地区))

2-2. 関係者・関係機関との連携活動

- 関係者・関係機関とのミーティング数は西岸地区での目標 18 回のところ 40 回を実施し達成。

- 関係者・関係機関の対応改善について、事業スタッフとの関わりの中で観察された変化は以下の通り。
 - ジャラゾン男子小中学校の校長：子どもたちの話に耳を傾けるようになった。教師による子どもたちへの体罰についてより厳しく取り締まるようになった。
 - ジャラゾン女子小中学校のスクールカウンセラー：1年次は非協力的であった子どもの基本情報収集を今年度は積極的に実施したり、時折WSの見学に来るようになったりと、プログラムへの関心が高まった。
 - カランディア女子小中学校のスクールカウンセラー：事業スタッフとより頻繁に子どもたちについての情報交換を行なうようになった。
 - 保護者：プログラムの内容に対する理解が深まった結果として、これまでの子どもに対する対応の仕方を見直す保護者が出た。また、難民キャンプでは心理ケア全般に対する偏見が根強いに関わらず、本事業のプログラムをもっと知りたい、自分たちも体験してみたいという要望が多数上がった。
- 関係者へのヒアリングと観察を行ったところ、約50割以上の関係者について認識の変化や子どもたちへの対応の変化を確認することができ、目標を達成した。

2-3. 心理社会的ケアプログラムの普及と実践者育成

- PSC プログラム理解度テスト：目標である新規作成1を達成。
- トレーニング：目標4回・60人の内、3回・46人を達成。未達成の1回は桑山専門家によるトレーニングを予定していたが、弊団現地スタッフ（ファシリテーター）の更なるスキル向上が、今後の彼らによる対外的なトレーニング実施時の効果を高めると判断したことにより、現地スタッフへの指導に集中したために止むを得ず中止とした。絶対数としては目標より少ないものの、今後の現地スタッフによるプログラムやトレーニングの質向上に寄与した。3年次は、専門家による監修を強化しながら現地スタッフによるトレーニングを実施する予定。
- トレーニングにおけるPSCプログラム理解度テストの結果：事後テストにおいて参加者全員の点数が上昇し、目標を達成した。ただし、平均正答率は50%強と低かったため、事後テスト実施後にディスカッション形式でテスト内容の確認を行ない正しい理解の定着に努めた。このディスカッションにおいては多くの参加者が自ら正しい答えを導き出しており正答率50%とのギャップが目立ったが、一因として、書き言葉と話し言葉に差のあるアラビア語の特性が考えられるため、次回のテスト実施方法について再検討する予定である。
- トレーニング後の参加者によるPSCプログラムの実施：3回とも毎回参加者が異なる4-6日程度の単発トレーニングであったこともあり、参加者が新たにPSCプログラムを提供した実績は確認できていないが、カウンセラー等の業務の中でPSCのエッセンスが活用されていることは期待できる。本年度のトレーニングは個人向けがメインとなったために、プログラムを提供するにあたり必要となる環境整備へのアプローチが欠けていたことが要因と考えられるため、次年度においては団体や組織等との連携を模索することを検討している。

- PSC ファシリテーターネットワーク：目標である新規構築1を達成。Facebook 上でトレーニング参加者によるグループページを作成し、トレーニングで使った PPT や関連資料のシェア、情報交換やフォローアップのために活用していたが、トレーニングから日が経つにつれメンバーからのレスポンスが悪くなり、事業終了時点ではほとんど機能しなくなってしまった。短い単発のトレーニングにおいて参加者の継続的コミットメントを求めることの難しさがあると考えられるため、次年度どのような形でネットワークを構築していくのかは課題である。
- PSC 分野の関連機関・団体とのミーティング：目標 6 回のところ 9 回を達成。内 1 団体とのミーティングはナブルスにおけるトレーニング実施につながった。さらに内 2 団体からは強い関心が示され連携を模索している状況であり、その内 1 団体である Arab Fund へは提携団体ナフスからエルサレムでの PSC プログラム事業について新規申請書を提出し前向きな検討が進められている。
- ファシリテーター評価基準：当初申請書には記載したものの、単発のトレーニングにおいては評価をすることは難しいことが判明したため作成しないこととした。
- また、事業スタッフのラジオ出演の反響としてより多くの人々に本事業が認知されるようになった。

2-4. 心理社会的ケアシンポジウムの開催

- 参加団体数・参加者数：UNRWA 関係者、国際 NGO、公的機関、大学等から 18 団体・53 名が参加し、目標の 5 団体は達成、参加者は目標 70 名に達しなかったが、昨年度に比べ心理社会的ケアに関連する分野や組織・団体の参加が多く、有意義な場となった。
- メディア露出数：パレスチナの大手新聞社である [ALQUDS](#) により [記事](#)とともに映像がオンラインにて配信され、記事は延べ 1400 人以上に閲覧され、[映像](#)は 370 回以上再生されている。また、当日の参加者や事業スタッフにより [Facebook](#) にてシンポジウムに関する投稿を行なった。投稿数をトラッキングすることは難しく数値として測ることが出来なかったが、上記結果により当初期待していたビジビリティの向上は達成できたと考える。
- 参加者による評価：アンケートに回答した参加者の 96%が本シンポジウムは非常に有益、または、有益であったと回答し、目標を達成した。

プログラムを提供しているジャラゾン難民キャンプの UNRWA 学校長からのスピーチにおいては、本プログラムが現場のニーズに即し、子どもたちに良い変化を出現させるものとして語られた。公にその成果を認めていただき、関係者及び多くの人々に周知されたことは、今後西岸地区における PSC プログラムの普及の一助となるものである。さらに、シンポジウム後、複数の国際 NGO 等から問い合わせがあり、本事業外での PSC プログラム提供に繋がった。

(4) 持続発展性	(ガザ地区) 各提携団体において本プログラムは大変評価されており、今後新たに PSC 部門を設けプログラムを提供していくことが検討されている。それにあたりノウハウの移転を強化するため、3 年次においても同じ提携団体と活動をしている。また、その他複数の団体から関心が寄せられ将来の連携可能性も検討されている。一方で、ガザにおいては封鎖状態が続き経済状況が悪化の一途を辿り、また海外からの寄付やドナーも減少傾向にある状況となっている。故に既に様々なドナーからの資金提供を受け既に様々な活動をしている提携団体においても、さらなる資金調達は喫緊の課題となっている事は事実である。他方、研修を受けて PSC ファシリテーションのスキルを身に付けた提携団体に所属する研修生 18 名のうち、主にボランティアベースではあるが、多くが既に外部に招かれ・もしくは赴き、PSC を子どもたちやケガによるトラウマを負った人々へ提供している。今後は、PSC の対象を広げながら、過去に育てた研修生も含め彼らが引き続き PSC のスキルを保ち、磨き、そして新たな PSC ファシリテーターを育て、加えて PSC を必要としている組織や人々とのネットワークを構築できる環境と仕組みを整備することで、ガザにおいて PSC が根付く環境を整える事を目指し、活動を行う予定である。 (西岸地区) 今後は将来的に提携団体であるナフス・エンパワメントにおいて PSC プログラムが引き継がれ、主に PSC ファシリテーターの育成を目的とした研修を提供していく事を検討している。現時点では、本年度ミーティングを行った団体の内 2 団体からは強い関心が示され連携を模索している状況であり、その内 1 団体である Arab Fund へは提携団体ナフスからエルサレムでの PSC プログラム事業について新規申請書を提出し前向きな検討が進められている。また、シンポジウムをきっかけに国際 NGO から連携の提案を受け、ある難民キャンプ内の学校にてカウンセラー向けに PSC ファシリテーション研修を 1 ヶ月間提供するなど、既に活動も行われている。他方、ラマッラを拠点とするナフスは、本事業においては西岸地区において 2 つの難民キャンプにおいて PSC 実施の経験を積んできたが、西岸地区においては、難民キャンプとキャンプ外、として都市と地方、村の特性がかなり異なる事から、対象地域によって、また期間や対象団体の特性によって、プログラムの内容等を変更する必要がある事が見えてきた。故に、今後は難民キャンプにおける PSC 提供の経験を積み上げつつ、他地域や異なる特性を持つ組織・集団を対象とした PSC 実施の経験値を新たに積む事を目指している。
------------------	---